

—ただキリストと共に歩む—

水戸無教會

編集 半田梅雄
第九号

クリスチャンの常識

半田梅雄

洗礼を受け、聖さん式に列し、日曜を聖日として教会にゆく、これがクリスチャンの生活である。黒服白カラーの特異な服装は神父の制服であり、尖った屋根と輝く十字架は教会堂の特色である。キリストの像、マリヤの像、説教台とオルガンは教会に必要な調度品である。柔和と謙遜は教役者に欠くことの出来ないポーズである。地位と財力のある信者は長老であり、政治力のある者は運営委員である。献金の多い者は尊敬せられ、程よい自負と適度な自己満足を伴う病人慰問と貧乏人救済事業、これがクリスチャンの生活であり、常識であるとい

う。
常識、常識、実に恐るべきは常識である。バチカン宮殿とローマ法王の権威は、彼とその側近がこれを維持しているのではない。実に全世界に何億というカトリック信徒の常識がこれを支えているのである。彼らはおのれの法王がケンラシタル法衣をまよえば、平伏して彼の足に口づけする。日本のプロテスタントは多数決をもって信仰告白を制定する。信條によって信者であるか否か、定まり、多数決によって何事も定められてゆく事が現代の常識らしい。
常識、常識、パリサイ人の常識より見れば、イエスの福音は神を流す言となり、割礼によって人は救わ

れないと叫ぶパウロはユダヤ人にとって許し難き非常識家であった。法王の絶対権は常識であった時、これに反抗して立ち上がったルターは悪魔とされた。洗礼によらず、牧師によらず、教会によらず、たゞキリストを信ずる信仰のみによって人は救われると内村鑑三が叫ぶ時、全日本の教会は異端に耳をかすなとそっぽを向いたのである。

常識、常識、常識こそ恐ろしい律法であり、我々の日常生活を安易に支えるかくれ蓑である。そこには発展はない。成長もない。あるものは生の習慣化と一つ覚えの無意味な反復丈である。無教会が無教会という名の教会なら、それは地に棄てられた塩に過ぎまい。

ヨブの敬虔と繁栄

「ヨブ記研究(三)」

大森 孝 夫

ヨブ記一章一節から五節までは異邦人にして砂漠の人たるヨブの人物とその敬虔なる生活および苦難前の繁栄について述べておる箇所であります。即ち一節は「そのひととなりは全く、かつ正しく、神を恐れ悪に遠ざかった。」とヨブの人物を紹介しております。勿論、この「全く、かつ正し」とは、神よりみての完全さをいったものではなくたゞ人間の眼より見ての完全無欠と正義のことを述べたものであつて、ヨブは常に眞実を以て総てに対し、高潔敬虔に立派な神の僕であると共に紳士であつたことを申し述べているので

あります。もし旧約の三大義人(前講参照)の一人であるこのヨブの正義に就いて説明不足を感じる人があるならば、どうぞヨブ記二九章と三一章を開いて頂きたいと思ひます。殊に三一章は「旧約に於ける山上の垂訓」とまで呼ばれている箇所でありましてここを学んで頂きますならば誰しもヨブが正しく道徳的に全く責むべき余地がなかつたことを認めるであります。次に信仰の人としてのヨブ、神を恐れ神に対し誠に敬虔であつたところのヨブに就いての具体的事實は四・五節が示してくれま

す。人は悲境逆境にある時は比較的、純粋な信仰を保ちやすくありますが順境の時、富名譽の中にあつて信仰を守り通すことは極めて困難であります。当時ヨブは物質的繁栄と社会的名譽の極にあつた事は二・三節と二九章の示すところでありま

す。古代に於ける財産は主として家畜でありましたがヨブは実に莫大なる家畜を所有しておつたのであります。僕も非常に数多くあります。そしてヨブは社会的に数々の貢献を致しましたので、世間の人々は非常な尊敬を払い彼は「東の人々」即ちパレスチナよりユーフラテスに至る地方の住民たちの中で最高最大の人物と呼ばれるまでに至つたのであります。またヨブは多くの子女に恵まれました。但しヨブの子女及び家畜の数に七・五・三の数字を用いましたことは完全な幸福を表すためであつて実数ではありません。かゝる繁栄の中にあつても敬虔なヨブはその信仰と親心とを以て、子供たちが恵まれた境遇のゆえに宗教的義務を怠り、神から離れるのではないかとその行為と心

使徒行伝研究(四)

人を縛る律法

半田 梅雄

使徒行伝を大別すると一章より十二章までと十三章より終り二十八章までの二つになる。一章より十二章までの中心地はエルサレムで、中心人物はペテロ、ヨハネ等である。十三章以下は、アンテオケから出発したパウロの伝道旅行が殆んど主となつてゐる。然も九章の大部分はパウロの回心の記事であるから、使徒行伝の三分の二はパウロ伝と云つてよく、そこにパウロの自由の信仰、信仰のみによつて人は救われる福音が歴史的に綴られている。然るにその後の世界史は、四世紀より一五世紀頃まで凡そ千年の間ペテロの後継を

もつて任ずるローマ法王によつて、カトリックがキリスト教を代表し、遂には政治的支配権さえ握るに至つてゐる。ルター、カルビン等によつてプロテスト(反抗)されたカトリックについてこゝで詳述することは出来ないが、「教会の中に救いあり」という主張と、作られた信條、階級組織化された諸制度、行々しい儀式を一見した上で、信仰以外の形骸が如何に人間を窒息させるばかりに組み立てられてゐるか諒解出来よう。このことはユダヤ教の中から生れて死骸化したおびたゞしい律法にがんじがらめにされた同胞を自由の世

界に引上げると共に全人類を罪の魔手から解放したイエスの十字架が無にされ、律法主義的暗黒が世を覆うていたことになる。

エルサレムにはそういう律法主義(形式主義)の本山とも言ふべき神殿があり、割礼を受けた者のみが神の選民だと誇稱するユダヤ人の傲慢と、形式的に律法を守ることにのみ腐心するパリサイ主義が目光らせてゐる。

弟子たちもユダヤ人である以上これらと無関係であることは出来ない。今彼らはそうした錯雜せる環境の中で主イエスの約束を待つてゐる。

一つ心

一章一三節ペテロ以下十一人の名があげられてゐる。この十一人はイエスが

選んだ十二使徒の中の一人である。残る一人イスカリオテのユダについて一五節以下にペテロがその最後を述べてゐる。

彼らは婦人たち殊にイエスの母マリヤおよびイエスの兄弟たちと共に、心を合せてひたすら祈りをしてゐる。こゝには師なきあとの主導権争いというものはない。男女の差別もない。あるものは一つ心になつて祈る真剣な態度丈である。

「信仰は祈りである」という。祈りは自己の無力を知る者が、見えざる神にひたすら依り頼む態度である。

「神は在し必ず約束を果し給う」二章に起る聖靈降臨(ペンテコステ)にはこのような準備の時があつた。たゞ漫然と信仰の結実丈を欲するは愚であらう。

酒枝義旗先生の講演に聞く

世界史の夢と現実

「使徒行伝一六・六〇一五」 半田

十月三十日、日立市で吉川兄たちの主催による酒枝先生の講演をうかがうことができた。お話は使徒行伝一六の六一―一五で、パウロがアジア伝道を禁じられ、更にビテニヤにゆくこともさえぎられたことについて、これは要するに伝道の失敗を意味する。この失敗の意味についてよく考えてみる必要がある。他の宗教は、神という超人間的な力を動員する為のものである。ところが、キリスト教に於ける神は、欲求への助勢ではなく、その反対に私たちの意思に対してストッパーをかける神である。即ち人間の利害とは無関係に神は独自の意思を持って宇宙を支配し給う。

私たちは純粋な動機で事を行つても障害にぶつかることがある。そういう時人の取る態度は大体次のようなものであろう。

- 1、他人の行為に理由を帰す。
- 2、別な事情に理由を帰す
- 3、自分の祈りが足りなかつた。愛が足りなかつた

この第三の態度が、普通クリスチャンの取る態度であらう。然しこれ丈ではまだ本当に信仰に立っているとは言えない。第四番目の態度は、この障害、この失敗は神のご計画によるものだといふ深い体験である。

パウロは学識もあり、常識も豊かな人である。当時の世界は地中海沿岸地方で政治的にはローマ、文化的

にはアテネが中心地であつた。巨大な山のようにそびえるこの二大勢力の中に入つて、如何にして福音を伝えるべきか。彼の味方には今日のように多くの教会も、牧師もない。勿論頼むべき神学もない。あるのは唯「エス我を生かし給えり」の証丈である。周到な彼は準備としてまずアジアを固め、ビテニヤに福音の種子を播こうとした。所がその二つ共失敗した。途方に暮れた時彼は夢を見た。マケドニヤ人が来つて我らを助けよと言う。彼はこの時、これこそ神のみ意だと確信して海を渡つた。こゝは紀元前三二四年アレキサンダーがペルシヤ遠征の為史上最大の大軍を渡らせた場所に近い。それに比してパウロの渡海は全く話にならない無力なものに見え

る。然しアレキサンダーは歴史上の一挿話としてその名を止めるに過ぎない。ナポレオンもヒトラーもそうである。誰が彼らの後を追おうとするだろう。然るに貧しき天幕工の伝道者パウロの夢は無数の後継者によつて今尚見続けられている。ルッターも内村鑑三も、バツハもベートーベンもこの夢によつて生きて大きな足跡を残した。私たちもこの夢を見ているのである。

藤井武先生を通して、人生に眞の光明を見出したと言われる酒枝先生は実に淡々と語りながら、深い地の底からほとばしつてくる水の様に清烈な感動を与えられた。(文責有記者)

ピリピ書研究(一)

半田信子

御承知のようにピリピ書は、使徒パウロが、獄中よりピリピ教会に贈った書簡である。獄中よりかゝれた、エペソ書、コロサイ書、ピレモン書など、共に、「獄中書簡」と言われている。このピリピ書の始めから終りまでを貫いているものは、パウロの心に溢れるキリストに在りての感謝と磊こびである。(腓一・一八、二一・十七—一八、三・一、四・一、四・四—七、四・十参照)パウロの伝道生涯は、決して平易なものではなく、多くの迫害と苦難の連続であった。(哥後十一・二三—二九参照)しかしこれらのなやみ、苦しみ、迫害は、パ

ウロから此のよろこびを奪い去ることは出来なかつたのである。「されど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したまう者に頼り、勝ち得て余あり」(羅八・三七、三八)であつたのである。「患難をも喜ぶ」(羅五・三)「汝らはキリストのために啻に彼を信じる事のみならず、また彼のために苦しむ事も賜わられたればなり。」(腓一・二九)と、パウロの言つて居られる、如く、パウロのこの磊こびは、キリストに在りての磊こびであり、我を強くし給うものによりて、凡てのことをなし得るなり。「(腓四・十一以下)であつたのである。パウロは

常に、キリストに在つて、感謝と歎岳に溢れていたのである。このキリスト中心の生涯、「我にとりて、生くるはキリストなり、死ぬるも又益なり」(腓一・二一)とのパウロの勝利の生涯が又、私の信仰生涯でもあり得る様にと祈りつゝ、此のピリピ書を学んでゆきたいと思う。

ピリピ(ギリシア語で馬好きの意味)は、ギリシアのマケドニアの有名な都邑で、元クレニデス(Krenides)又はデートン(Daton)と称し、テラス国に属して居たが、アレキサンダー大帝の父であるマケドニア・ピリピがこれを畧取し自分の名をとつてピリピと称んだところである。此の地方は昔から富を多く産し、早くから富有

な地方として知られていたが、商業や文学に於ては余り有名ではなかつた。歴史的に特に有名になつたのは、紀元前四二年、ロマ皇帝カイザル・アウガストが大戦に勝利を得てからであり、大帝はそれを記念する為、ピリピをロマの植民地とし、同時にピリピ市をロマ市に型りて改造した。その公民は首都ロマの人と同様の権利をもち、ロマの法律、習慣、言語を用いていた。「こゝはマケドニアの中に於てこの辺第一の町で植民地である」(徒十六・一二)と、ルカが記しているのはこの為である。この地は又、偶像礼拝の盛んな都市であつた。現今ピリピの都市は荒れ果て、唯その古跡のみが存しているとのことである。(つづく)

目覚めている事について

石原秀志

「汝ら此処に留りて目を覚しおれ」(マルコ十四・三四)

眠りは本来人間の極めて自然の現象でしかない。けれども、目覚めて居らねばならないという時、尚さまざまの原因によつて睡魔が迫り来り、如何にしても目覚めている事が困難である事をはじめみ覚える時がある。肉体の疲労も精神の疲労も我らを眠りに誘うが、そのような状況にあつて主イエスの御言葉の如く、誘惑に陥らぬ様目を覚し且祈るという事は、心が熱していたとしても、如何に困難であるか。

それにも拘らず、主イエスは我等にも「此処に留りて目を覚しおれ」と命じ給う。我等より数十歩離れてイエスが懸命の祈を為し給う時、目を覚し祈り続ける事によつて我等も亦主イエスの弟子であり、主イエスの戦を共に戦う事を許されているものである事を自覚する。

旧約の詩人は、しかし既に早く、我等の「まどろみ」の時にも、尚まどろむ事なく、眠る事もなく、常に醒めて在し給う主に對する信頼を告白した。

「視よイスラエルを守り給うものは微睡むこともなく寝ることもなからん」(詩一

二一) 我等が疲れ果て、如何にしても眠りより逃れられない時に、イエスは肉体弱きなりと慰め給うたのであつたが、イスラエルの詩人は、その様な時にも決して微睡すらもされる事ない主によつてその蔭に宿らしめられる者の幸福を歌つたのであつた。(詩九一)

預言者としての召命を受けた若きエレミヤの心に深く示された最初の眞理は何であつたか。「エレミヤよ、汝何を見るや。我答えけるは巴旦杏の枝を見る。

エホバ我に言い給いけるは、汝善く見たり。そは我速に我が言を為さんとすればなり」(エレミヤ一・二)

「巴旦杏」は「目覚めいる者(シャーケード)」「我言を為さんとする」は「注視する(ショーケード)」と夫々意味される言葉である

が、この問答を通して彼はイスラエルと万国との神が常に目覚めて在し給うという厳肅なる事実に觸れ、預言者とはその語「見る者(ナービー)」の意味する如く、万国の歴史を導き給う神の見給う所を目覚めたる者の眼を以て見得る者である事の自覚に到達したのであつた。

イスラエルの長き暗黒の夜空に輝かしき光芒を放つた預言者こそ、民衆の深き眠りの唯中にあつて、まどろみ給う事なき聖なる實在に深く触れ、その語り給う言葉に聞き、その為さんとし給う所を注視する事の出来た目覚めたる少数者であつた。

ルカによつて記されたあのベツレヘムの最初の夜に於ける牧羊者達の記事は、我等に深き感動を与える。

与えられた彼らの務を果すべく羊の群を守つて夜の寒さと孤独の中に野宿しつゝ、目覚めていた此の無名の働き人に過ぎない少数者の上に、全人類に対するあの磊ばしい告知を最初に受取る光栄が臨んだという事は何と意味深い事であろう。

目覚めているという事は併し如何に難しい事であるか。イエスの語り給うた十人の処女達の譬（マタイ伝二五章）も花婿を迎えるという生涯の光栄に凡ての者が心躍らせていたにも拘らず、輝しい婚礼の席に参加する機会を失わせたのは処女達の不用意であり、目覚めている事が欠けていたからである事はつきり教え給うたものに外ならない。イエスは思慮深き五人と思慮を欠いた五人と対比されたが、果してその日が訪れ

た時に、十人の中の幾人がほんとに目覚めた者でありうるであろうか。そして同時に、目覚めているという事は唯来り給う花婿を出迎える事を知っているという事ではない。やがて来るべきその日の磊びと光栄とを思つてその存在の凡てが深く自覚的なものとされてゆき、そのような自覚の中に強められる罪赦されし者の感謝と、恩恵の中に絶えず活かし且望ましめ給う聖なる父に対する不断の信頼と、此の二つのものに我等の生の根底が置かれる時、ほんとの意味で我等は目覚めている者としての歩みを為しうるであろう。

来 信

千葉 Y 姉

梅雨を思はせるようなお天氣が続きましたが二十五号台風が去ると同時に秋晴れのよい空が見られるようになりました。今まで無関心であつた水戸とか茨城とか云ふ名がラヂオや新聞にあるとすぐに氣にかゝるようになり、本当に近く親しく感じられて居ります。皆様にはお恵の下にお元氣でいらつしやいますこととお喜び申し上げます。

昨日は思ひがけなく黒崎先生の御講義のプリント御送り下さいまして誠に有難うございました。そろそろ心がゆるみかけてサタンに負けかけております時、又も神様は私を忘れ給はず、御自分の方に引もどす為

之を御送り下すつた其の深い愛の御計画を想ふ時感謝の氣持らで一杯になります。それと同時に水戸の皆様

様に盡きぬ御礼を申し上げます。完全に近いはつきりしたプリントと、先生の御言葉

て、神様本位、凡てはキリストのためと変わってきつゝあることとわかります。そうなり度く祈つて居ります。あの時に存じ上げた兄弟姉妹のことをいつも想つて居ります。

きつと益々信仰に進まれていることとございましょう。どうかサタンに負けず、常にしつかりとキリストにつながつて居られるように祈つております。撰ばれた少数の私達は又他の人達にこの恩恵を分けなくてはなりません。其の意味でも今度のプリントは大変有難く存じます。御手数をかけて済みませんがもう一部御送り頂けましたら幸いです。どうか皆様の上に御祝福を祈り上げます。

来 信 (二)

N 兄

水無誌を毎月有難く頂いております。特に先日頂戴致しました第七号は殊の外皆様の澆刺とした御信仰の力が漲っており、然も小さな晴無五周年を心から祝福して下さいまして、主に在る御友情に深く感激させられました。昨日は又夏期講習会に就ての誠に立派な印刷物を頂きまして重ね重ね感謝の言葉もありませぬ。皆様それぞれに職場や家庭に於て御忙しい中にも拘らずこの様に立派な記録書を作り上げられました事、誠に主に在る愛と忸びなくば、の感を深くしております。そして皆様を通じて差伸べ給う豊かなる神様の愛の御手に感謝するばかりです。天上の森田隆夫兄もさぞ忸んでおられる事でありましょう。

晴無は目下十一月号の編集に大童です。何時もしどろもどろの仕事ですが、皆様の陰

の御祈りと天上よりの導きだけが唯一の頼りです。あまり忙しく、又いろいろな問題が重なるると全くどうなる事かと不安に馳られる事がありますし、それらに押し潰されそうな時がありますが、十字架を見上げると又勇気が恢復し、忸びと希望が甦ってくるから不思議ですね。しかしこれ位の事でへこたれては世の荒波に出たときどうするかと何時も思っております。御平安と御健康に恵まれ、今後共大役を勝ち取られます様御祈り致します。

後 記

美しかった木々の紅葉も既に半ばを散り盡した。朝々の霜は雪の様に白く厳しい。凜烈というにふさわしい霜柱

が、広い畑を埋めつくした光景は壯観である。夜空の星は殊更に冴えて輝きを増す。そうじて冬の自然は、アイマイさを消して、はつきりした姿を惜しみなく見せてくれる。信仰生活も一度は冬を通るべきであろう。黒白を明らかにするののもその一つである。

昭和三十年十一月 発行
水戸無教会第九号
実費十円十共
編集兼印刷人 半田梅雄
発行人 松本文助
発行所 水戸市東原町四六四二
水戸幼稚園内
水戸無教会